



第 91 号

石田 郁雄
KCCN 理事
司法書士

あまりにも便利な現代の生活を再認識する

10月の中旬、自宅の風呂の給湯器が壊れました。電源スイッチを入れて水を出すと、火は点くもののすぐに消え、液晶パネルにはエラーメッセージと思われる数字が点滅します。何回試してもそうなります。

翌日にはガス器具販売店に連絡し、見に来てもらったところ、コンピュータの基盤の故障であることがわかりました。部品の保存期間が経過しており、修理ができないため、本体の交換になるとのこと。

この給湯器を買ってから19年も経っているそうで、そりゃ19年も使っていれば本体交換になるだろうなと思ったので、はい、交換で結構です、と言ったところまではよかったのです。業者さんから出た言葉は「ガス給湯器はアジアで製造しているのですが、アジアの国がコロナ禍でロックダウンされており、製造できない状態です。新しい給湯器はいつ入ってくるかわかりません」。

なんと！これから寒くなっていくというのにお風呂無しの生活を続けなくてはならないのですか。シャワーも同じ給湯器から湯を出す仕組みなのでシャワーを浴びることもできない。では銭湯に行くか？それもいいかな、とも思いましたが、年老いた母と生活しているので、クルマで毎回、母を銭湯まで送るのもたいへんかもなあ、とか。

友人にそんなことを話したら、ちょうどタイムリーにテレビニュースやネットニュースで報道されていたと聞きました。私も見てみると、給湯器だけでなく、シャワートイレなどの建築資材が同様に製造できずに在庫を切らしており、新築住宅にも給湯器やシャワートイレが付いてない状態のものがあるのだそうです。

へー、そうなんだね、と納得したものの、お風呂がない生活は困りものです。そこで私のない頭をひねって、お風呂に替わる手段を考えました。キッチンのガスコンロをフル稼働してやかんや鍋でお湯を沸かし、それを風呂場に運んで貯めて、手桶で体にかける。つまり行水ですね。

浴槽にお湯を貯めるのでは大量のお湯が必要になるため、ホームセンターに行き、巨大なバケツ(実際には90Lサイズのプラスチックのゴミ箱)を買ってきて、それにお湯を貯めることにしました。あらかじめ半分くらい水を張っておいて、そこに沸騰したお湯を貯めていく方法をとれば、30分もかからず巨大バケツが適温のお湯で満杯になることがわかりました。

(次頁に続く)

また、体にかけて気持ちの良い温度のお湯を貯めておくのでは、どんどんお湯が冷めていくため(追い炊きができないので)、多少熱い目のお湯を貯めておき、洗面器で水でぬるめて使う方が良いこともわかってきました(生活の知恵ってやつです)。

熱いお湯をバケツに貯めておくと、風呂場全体が湯気で暖まり、湯船にドボンと浸かることもないのに、なぜか体がポカポカすることも発見しました。

もっと便利な方法はないものかとインターネットで情報を探していたとき、TOTOのホームページでこんなことを見つけました。

入浴と似た行為に「行水(ぎょうずい)」があります。「行水」は、桶やタライにお湯や水を入れ、それを浴びて体を洗うことを言いますが、もともとは水で体を清める禊(みそぎ)に関係した、宗教的意味合いを持つ行為でした。もちろん、庶民にとっての「行水」は、体をキレイに保つためのもので、江戸時代には銭湯が流行しましたが、銭湯に行けず家庭風呂もない人は「行水」で済ましていました。

当初は水を入れて浴びていましたが、その後、現在のように給湯器が普及するまではタライに入れた水に鍋やヤカンで沸かしたお湯を注いで温度を調節してから浴びるようになりました。(以下、略)

(TOTO 社ホームページ、ティドビット～水まわりのまめ知識～、～浴室に関する素朴な疑問・歴史・お役立ち情報～、「行水」の起源と「タライ」、の項

<https://jp.toto.com/tips/tidbit/bath/016.htm> より引用。下線は石田による)

これってまさに今の私そのものですやん！人の考えることは昔も今も変わらないんだなあ、と妙に感動しましたが、考えてみれば、ボタン一つでお風呂が用意できる生活って、私たちとしては当たり前なもの、昔の生活からすると、信じられないような進化なんですよね。現代でもこんなに便利でない国もたくさんあることでしょうし。

コロナ禍による影響が思わぬところで私にも降りかかったものの、現代の便利すぎる生活を改めて見直してみるきっかけになりました。

しばらくの間、昔の日本人の生活習慣を味わいたいと思います。

(2021年11月)